

# ポンプを使う人



消防庁 国民保護・防災部長 岡山 淳

江戸の「火消し」、明治からの「消防」、いずれも任務を端的に表していてわかりやすい。「江戸の華」と逆説的に呼ばれた火災被害の身近さからくる切実な表現であったのだろうか。英語で消防士はファイヤーマン (fireman: 直訳すれば「火の男」) あるいはファイヤーファイター (firefighter: 直訳すれば「火と戦う人」)。男女の別なく消防士が活躍する現代においてはファイヤーファイターが正しい英語ということになるようだが、いずれにせよ、燃え盛る火に果敢に立ち向かう消防士の心意気は世界共通という思いにさせる。

ところで、フランス語では、消防士のことを「ポンピエ」(pompier)という。そう、「ポンプを使う人」である。17世紀、手動ポンプが発明され、これを装備した「ポンプ衛兵隊」(gardes-pompes)が1716年にパリ最初の消防隊として創設されたことに由来する。もちろん、それ以前にも消防を任務とする人々がいたわけだが、消火の手段がせいぜいバケツリレーであったとすれば、特別の部隊、特別の職業と認識されなかったのだろう。素手では火災、その他の大きな災害に対応することができない以上、消防の仕事においては人、組織、訓練等ソフトと、ポンプにはじまる資機材等ハードが不可分の関係にあることをよく示していると思う。災害のありようの変化、技術の進歩、防火・防災意識の向上に伴い、ソフトとともに消防の装備から通信手段、建物等防火対象物サイドの設備・器具等まで、ハードをどう整え、使いこなすか、使いこなしてもらうかが常に見直されていくことになる。その大きな流れの中で、住宅用火災警報器の設置義務化は、すべての国民に日頃から「防災の人」になってもらう画期的なことと言えるのではないか。早期普及にあらゆる手を尽くしていただきたい。

さて、情報通信分野に長く身をおいてきた者として、ここでは同報系の市町村防災行政無線(以下「同報無線」という。)整備の必要性を強調しておきたい。同報無線は、豪雨や台風、地震、津波、火山噴火等の自然災害が発生した際に、避難勧告を迅速的確に多くの住民に伝達するために大きな役割を果たす。そのため、「消防力の整備指針」にも規定されており、「武力攻撃事態等における国民の保護のための措置に関する法律」いわゆる国民保護法においても、同報無線が警報を住民に速やかに伝達するための主要な手段と位置付けられている。さらに、人工衛星を経由して同報無線を自動起動することにより、住民に緊急情報を瞬時に伝達する全国瞬時警報システム(J-ALERT)の整備も進められており、10月からは気象庁の緊急地震速報の提供も始まる。このように、同報無線の重要性・有用性が一層増してきているが、全国平均の整備率は平成18年度末で75.2%、整備率100%の地域もある一方で30%代にとどまる地域もあり、消防庁としては引き続き、整備を積極的に推進していくこととしている。MCA無線のサービスや市町村デジタル移動通信システムを利用して同等の機能を実現することも可能であり、また、特別な財政措置も確保しているので、すべての市町村住民が一日も早く「同報無線を使う人」となるよう積極的な取組をお願いしたい。

# 消防の動き



平成19年  
**10月号**

No. 439

- 平成20年度消防庁重点政策
- 平成20年度消防庁予算概算要求の概要
- 「危険物施設における保安の充実方策のあり方検討会」の発足
- 「救急業務高度化推進検討会」の発足